

解説

フェルマーを題材にお話を作ろうという構想は、写楽の構想と同時に生まれた。何をきっかけにフェルマーのことを知ったのかは最早忘却の彼方にあるが、とにかくその時に私はフェルマーの本職が法律家であったこと、余暇に興味で数学をやっていたこと、そして本職よりも余暇の方で大きな業績と名を残していることを知った。これは、腰掛に弁護士をやっていた当時の私の姿と大いにダブった。

それでも私はまず写楽を題材にすることを選んだ。これはひとえに、私の怠惰という本質に起因する選択である。写楽の方が、日本語の文献・資料が充実していそうだったから、写楽を選んだのである。お話を作るには、まずは色々な情報を仕入れてイメージやアイデアを膨らませる必要がある。細部の描写を正確に行うには彼らが生きた時代の文化風俗についての綿密な考証も求められるだろう。正直なところ、私は当初写楽よりも本職が法律家で私自身により近いと思われるフェルマーの方に魅かれていたのであるが、フェルマーの数学的業績についての解説はあっても、彼の生活や法律家の仕事についての日本語文献はほとんど発見できなかったのである。フェルマーは17世紀ブルボン朝時代のフランスを生きた人である。日本語の情報がほとんどないとなると、フランス語（あるいは少なくとも、英語）の資料を仕入れる必要がある。英語の資料を読むのは、面倒くさい。フランス語の資料を読むとなるとフランス語の勉強から始めなければならない。それはあまりに面倒だったので、まず写楽から入ったのである。

写楽のお話を書き上げてから、フェルマーのことはしばらく忘れていたが、熱が再燃したにはきっかけがある。はつきりと覚えている。「CODE VEIN」というテレビゲームでマラソン（レベル上げ、金稼ぎ、アイテム稼ぎ、出現率の低いアイテムの入手等の目的のために長時間行う単純な反復作業のことを指す業界語である）をしている最中に、暇つぶし用に流していたYouTubeで、フェルマーの最終定理を取り扱っている動画を見たからである。芸人・オリエンタルラジオの「あっちゃん」こと中田敦彦氏のチャンネルであった。単純に言えば、その動画が私にはとてもおもしろかったのである。あつちやんの迫真の語り口に数学に対する情熱を再び駆り立てられた私は、参考文献として紹介された（そしてその動画が大部分を依拠したと思われる）サイモン・シンの「フェルマーの最終定理」という書籍をすぐにアマゾンで購入した。この本も大変おもしろく、一息に最後まで読んでしまった。

シンのこの本には、数学界のビッグネームが怒涛の如く登場する。これを読んで、フェルマーも、デカルトやパスカルといった同時代の巨人たちと交流があったことが分かった。思えば写楽にも、同じ時代を生きた有名な絵師がたくさんいた。私のイメージは、どんどん膨らんでいった。

ただ、すぐに執筆にとりかかっていたわけではない。シンのおかげでフェルマーの生い立ちや職歴はある程度分かったが、当時のブルボン朝の裁判官がどのように生活し、どのように職務を行っているかは相変わらず分からなかった。このあたりを活写するには、更なる資料を集める必要があった。結局、外国語の文献と対峙しなければならぬのである。また当時の私はゲームの際に色々なYouTubeの動画を流すのが癖になっていたが、それを見て「私にもできるのではないか」という下衆の勘繰りがもやもやと頭をもたげてきていた。私は、フェルマーの話を実筆しなくなると同時に、本格的にもYouTube業界にも進出したいなっていたのである。

フェルマーの情報を集めるにはまだまだ時間がかかると思われたので、私はまず動画制

作に手を出した。まず作ってみたのは、テレビゲームの批評動画である。他方で数学熱も再燃していた私は、高校数学の解説をしているYouTubeのチャンネルを見漁っていた。その手のチャンネルは、大抵サムネイルに動画で解説する問題が書いてある。私はサムネイルだけを見て問題を自分で解き、解いたら動画の本編を見て答え合わせをするということを繰り返していた。余弦定理も加法定理もすっかり忘れていたので、ちよいちよいカンニングをしながら、であるが。

私が見ていた動画は高校数学レベルのもの（それも文系向けのもの）だけであるが、それでも解けない難問は出てくる。ある日、私が思いつく限りの方法を試しても全て袋小路に入ってしまう難問にぶつかった。諦めて動画を見ようと思っただけで逡巡し、また別の方法で考えようというのを繰り返していた。それでも、岩盤は一向に崩れなかった。あたかも谷山志村予想と格闘するワイルズのようであるが、私の相手は所詮高校数学の問題である。全く、カツコよくはない。結局私が諦めて動画の本編を見ると、とても綺麗な解法が紹介されていた。ただ、そこで展開されていたのは私には到底思いつきそうもない発想であった。私は、端的に言えば絶望した。いや、以前から分かっていたことではあったので、「絶望を深めた」と言った方が正しいかもしれない。私には、結局フェルマーの小指の爪ほどの数学的素養もないのである。フェルマーなら、この程度の問題は暗算で解いてしまうだろう。紙もペンも必要ない。私は、家の敷居をまたいだけで高跳びのオリンピックに出場している気になっていた。多士済済の知の巨人たちと伍した気になっていた。それが快感であった。でも私に跨っているのは、所詮は家の敷居に過ぎなかった。私には、何にもできないと思われた。私はこの絶望と、どう付き合えばいいのだろうか。

その日のうちに、私は本編の冒頭部分の執筆を始めていた。吐き出さなければ、黒雲に押し潰されそうであった。

本作では、私は超人フェルマーを私の現身たる主人公にした。でも私は、フェルマーのような偉大な数学者の頭の中は想像もつかないものであることを改めて認識したわけである。だから結局、裁判官としてのフェルマーの凡人らしさを強調するような話になってしまった。このあたりの顛末は、超人を描くつもりが超人と向き合った凡人が自分の中でどう折り合いをつけるかを描く話に変貌してしまった『写楽斎』と丸つきり一緒である。『写楽斎』でも、当初は写楽という超人を私の現身たる主人公に据えていたが、結局その座はゆっくりと凡人・長喜にスライドダウンしていった。

突如として立ち込めた黒雲を吐き出すように執筆を始めたので、その時点でフェルマーの新しい情報は全く仕入れることができていなかった。ゆえに私は、もう諦めることにした。17世紀のフランスを舞台にするのではなく、遙か昔の遠くの異銀河を舞台にした。フェルマーと彼の周囲の人たちは、あくまで「モデル」という位置付けになった。こうすれば、登場人物の行動様式や文化習俗については好き勝手に設定することができる。山崎豊子のような周到な取材は必要ない。私が描きたいのは、凡人が自分らしく生きるためにはどうすればよいのか、というホモ・サピエンスにとって普遍的なテーマである。17世紀のフランス人にも、21世紀の日本人にも共通する話題である。17世紀フランスの風景を正確に細密に描くことに、意義は感じられなかった。先ほども述べたが、私の本質は「怠惰」なのである。

本作も、内容が伴っていれば誰かが英語訳や仏語訳を作ってくれることであろう。怠惰な私には、そんなことはできない。